

資料涉獵余話

その57

飯田線天竜峡駅以南

はアイヌの名工事者方
ネットが開通したとい
歴史的な名声も相ま
て、近頃秘境駅ツア
などが計画され、参加
者が日本各地から訪ね
て注目されているが、

もともと名にし負う難
路で、降水量が一五〇
ミを越えると今でも危
険予防のため通行止
め、運休となる路線で
ある。

たまの用事で乗車す

ると、乗降する客は高
校生以外無いに等しい
くらい少なく、停車し
た車窓から山側を見る
と「落石注意」と書か
れている。

飯田線不通による

バス事故死の追悼文集『啓助』

吉澤 健

『啓助』という珍し
い書名のこの冊子は、
どこでいただいたかさ
だかでない。淡い緑色
の山百合の花を表紙
に、ただ「啓助」とだ
け書いた全一〇七頁の
冊子で、背文字もなく

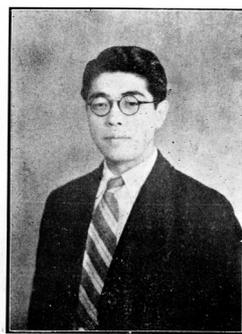
美術について、一点の
絵や茶碗をめぐって時
間の経つのも忘れて話
手にしはらばらとめ
し込み、ご教示いただ
くり奥付をみて、そこ
に編集者「吉沢修平」
の名を目にして「おや
啓助とは小島啓助とい

加えた降水で飯田線が
不通になり、連絡のた
め国鉄（現在のJR）
が仕立てた二台のバス
のうち二台目のバスが
増水・濁流の天竜川に
転落、三十五名の乗員
中、運転手と助手、乗
客三名だけが救助さ
れ、残る三十名が行方
不明となった事故があ
った。中部天竜駅の
手前が不通か所であっ
たという。

この転落したバスの
乗客の中に小島啓助が
いて、関係者の懸命の
捜索にもかかわらず遭
難死したのであった。
二十七歳の若さであ
る。勤めの休暇を利用
して名古屋の兄君を訪
ねた帰途のことであっ
たという。

この冊子は啓助のあ
まりにも早い悲劇的な
死を悼んで、同年生友
人知己の方々が編んだ
追悼文集で、啓助死亡
の翌年の昭和二十七年
七月の発刊である。
冊子の内容を項目的
に記せば次のようであ
る。

見聞きにご本人の遺
影と遺作俳句、次の頁
に松林桂月の悔状と当
時の新聞記事などをク
ラビア風に、次の頁に
父上の出版のお礼の一
文、続いて目次、本文
と続いている。



遺影



啓助

追慕するものが圧倒的
中心となつてこうい
う初知と、悲劇的な死
とはいえ、若い一人の
死を同年輩の人たちが
中心となつてこうい
う形を悼む、素朴ながら
心のもつた珍しい追
悼文集の存在を知った
ことであつた。